

北京におけるベトナム使節と朝鮮使節の交流

—15世紀から18世紀を中心に—

清水 太郎*

Vietnamese and Korean Mission Exchanges in Beijing: From 15th to 18th Centuries

SHIMIZU Taro*

Diplomatic relationships with China had been the most crucial issue to Korean and Vietnamese Dynasties throughout history. Korean diplomacy has been well documented, yet the nature of Vietnamese activities are little known, even basic facts such as members of the missions, timing of departure/return, and their tasks in China. Since Korean and Vietnamese missions used Chinese characters as their official letters, there were cultural exchanges among them, especially poem recitation, in the capitals of Chinese Dynasties as a by-product of their diplomacy toward China. It has been found that around 20 cases of such exchanges had taken place from 14th through to 18th centuries. Relationships between Korea/Vietnam and China showed occasional changes, reflecting the times. This paper discusses the cultural and historical significance of the exchanges of Korean and Vietnamese diplomatic missions that occurred in Beijing, a foreign capital.

Keywords: Vietnamese diplomatic mission, Korean diplomatic mission, poem recitation, diplomacy

キーワード：ベトナム使節，朝鮮使節，唱和詩，外交

はじめに

ベトナム，朝鮮¹⁾の各王朝にとって，中国との外交が最も重要な問題であることは現在も変わらない。しかし，朝鮮の対中外交は資料も豊富で詳細もよくわかるのに比べ，ベトナムのそれは，使節の構成や出発時期，中国滞在中の活動や帰国の日時等，基本的なことすらよくわかっていない。

* 鳥取県立公文書館；Tottori Prefectural Archives, 101 Shotoku-cho, Tottori City, Tottori 680-0017, Japan
e-mail: shimizu3@chive.ocn.ne.jp

1) ベトナム，朝鮮には様々な王朝が興亡したが，全てを王朝名で表記すると煩雑となるので，本稿では，便宜的に現代の国名を以て表記する。

ところで、両国の対中外交の副産物ともいえる形で、中国の歴代王朝の都で行われたベトナム、朝鮮の各王朝の朝貢使節同士の直接の交流は、現在のところ14世紀初頭から18世紀末にかけて、約20回にわたり確認できる。中国を訪れた他の国の使節間交流の実現が、言語的な制約もあってなかなか困難な中、両使節の交流は際だって多く、記録そのものが多数残ることに大きな意義がある。また、両使節の交流を詳しく検討することにより、特に不明な点が多い中国滞在中のベトナム使節の活動を知ることができる点に大きな意義がある。

両使節にとって、漢字や官話という媒体を通しての筆談や会話という手段による交流相手は必然的に限定されていた。琉球などわずかな例を除けば、中国に朝貢していた多くの王朝、地域及び民族の中で、両使節だけが漢詩の唱和や漢文による問答を行えるほとんど唯一の相手であった。

交流は当初漢詩の唱和が中心で、16世紀末以降になると漢文による問答も記録されるようになる。このような交流を通じて両使節は、それまで中国の書籍から作り上げてきた相手国に対するイメージを、交流を通じて得た情報や知識をもとに、より現実的なものに修正していく。つまり、両使節の交流は、交流を重ねることにより質、量ともに変化を見せる。

両使節の交流の研究史をふりかえれば、ベトナム、韓国両国でも早くから両使節間の交流についてふれた論考は目につくものの、自国史料の利用に偏り、両使節間の交流の全体像をつかめていないのが現状である。両使節の交流を個別的に研究した論考は多いものの、通時的に扱った研究はほとんどない。上述のように両使節の交流は時代が下るとともに変化を見せるため、通時的に見渡す必要がある。筆者も両使節の交流について取り上げてきたが、利用できた史料は、ベトナム側は『皇越詩選』や黎貴惇の『見聞小録』などで、一方の朝鮮側は、『朝鮮王朝実録』及び『燕行録選集』上下巻と『朝天録』4冊くらいであった。ところが、近年両国で新たな史料の刊行が相次ぎ、研究をとりまく条件が大きく改善し、それにともない改めて両国の交流を再検討する必要性も生じている。例えば、2001年韓国の東国大学校出版部から『燕行録全集』100冊が刊行されたのに続き、²⁾ 同年、『燕行録全集 日本所蔵編』3冊が、さらに2008年には『燕行録選集補遺』3冊が相次いで刊行され、中国でも『燕行録全編（第一輯）』12冊が出版された。³⁾

ベトナム史料も2010年5月、中国の復旦大学出版社からベトナム使節の記録を収録した『越南漢文燕行文献集成』全25冊が刊行された〔復旦大学文史研究院他2010〕。

このような新史料の相次ぐ刊行という状況を受け、両使節間の交流に関しても詳細が解明されるようになったが、それでもまだ十分とはいえない状況である。もっともこれは筆者の場合

2) 林基中氏が編集責任者となったこの『燕行録全集』には非常に多くの基本的な誤りがあり、利用にあたっては注意が必要である〔夫馬2003a; 2003b; 左2008〕。

3) 金榮鎮氏によれば、この他、2008年に『燕行録続集』50冊が刊行されたとのことであるが〔金2009: 145〕、筆者未見。

も同様で、基礎史料の相次ぐ刊行により、過去に発表した論考の修正、加筆を迫られている。よって本稿では、新たに刊行された史料に基づき14世紀から18世紀まで約5世紀にわたる両使節の交流を概観し、再考を試みたい。

I 16世紀初頭までの交流

I-1 その起源

両使節が交流した最初の例を明らかにするのは史料的な制約により困難であるが、12世紀末の南宋の頃にベトナム、朝鮮の両使節が偶然、身近に居合わせた可能性がある。⁴⁾

元朝の後半に、ベトナム使臣の莫挺之と高麗使節が双方の文学力を競う逸話がベトナムの記録に残るが、実際に両使節で交流があったのか疑わしい〔清水 2007: 114–118〕。

さて、韓国の研究者は、両使節間で文学交流が行われた最も古い例として李崇仁の「詠（咏）安南」という詩を挙げる〔崔 1981: 245; 2001: 53–54; 姜 2000: 66〕。しかし、これは、両使節間の交流ではなく、ベトナム使節を目撃した李崇仁の作詩であろう〔清水 2003: 65–66〕。

I-2 1460年の交流

史料から確実に確認できる最も早い両使節間の直接の交流は、ベトナム黎朝の梁如鵠と朝鮮の徐居正との間で行われた1460年の交流である。⁵⁾

徐居正（1420–88年）は、字を剛中、四佳亭等と号した。政治家として活躍する一方、多数の書籍の編纂に携わり、朝鮮漢詩の隆盛に大きな役割を果たした。徐は、謝恩副使として世祖6（1460）年6月甲寅に漢城を出発し、8月には北京に滞在、10月に帰国した。

一方のベトナムの梁如鵠（朝鮮の『世祖実録』では梁鵠とする）（生没年不詳）は、黎朝初期の官僚である。彼にとっては、二度目の訪明であった。ベトナム黎朝では、延寧6（1459）年10月、廢太子宜民が弟の黎朝皇帝仁宗を暗殺して帝位に就き、その年の10月20日、皇位継承の承認を得るため梁如鵠らを求封使として派遣した。⁶⁾ 梁らは、翌年の8月までには北京に滞在していたことは確実で、⁷⁾ 8月に入京した朝鮮使節と通州館で接触した。

両者の交流を述べる史料は、朝鮮側のみである。まず、朝鮮の『成宗実録』巻223、19年戊

4) 『嶺外代答』巻2、外国門上、安南国の条には、「旧制、安南使者班在高麗上。」とある。

5) このことを指摘したのは韓国の姜東燁氏で〔姜 2000: 69–70〕、筆者もこの交流を見落とし、次の1481年の交流を両使節交流の嚆矢と誤っている〔清水 2003: 66〕。

6) 『大越史記全書』（以下単に『全書』と略す。なお、『全書』は、陳荊和校合本（全3巻、東京大学東洋文化研究所付属東洋学文献センター刊、1984–89年）を使用した）本紀巻11、天興元年10月20日の条。

7) 『大明英宗睿皇帝実録』（以下『明英宗実録』と略す。中国の実録の場合は王朝名の後に皇帝の諡号を実録に冠して称する。朝鮮王朝実録の場合は単に王の諡号を実録に冠して称することとする。）巻318、天順4年8月己未の条。

申12月癸丑の条は、徐居正の逝去を伝え、その功績を述べている。この中で、ベトナム使節の梁如鶴と10篇に及ぶ唱和を交わしたことを伝えているが、現存する詩は、徐の文集である『四佳詩集』巻7、「詩類」に載る徐が梁に贈った五言律詩「安南使梁鶴の詩韻に次す」と梁が徐に贈った「朝鮮国徐宰相の詩韻に次す」五言律詩1首ずつだけである。

徐の「弟兄均四海」、梁の「衣冠同一制」の句などは、両国が同一の文明国であることを述べている。元朝時代には、高麗王朝の官吏がベトナムを「遠夷」と見なしていた発言が記録されているが、⁸⁾このように対ベトナム認識に変化が見られる。これが徐個人の認識にとどまるのか、それとも高麗王朝にとってかわって成立した朝鮮王朝の知識人に共通した変化なのかは定かでない。ただ、このような文言は、この後の使節の唱和詩にも見られる傾向である。徐は、ベトナム使臣以外にも日本や琉球の使僧や使臣に対して多くの詩を作詩、贈答しており〔米谷1998〕、この点では甚だ慣れていた。梁の句中の「東海波濤闊」「南天日月長」などは、両国が中国を中心にどのような位置関係にあるのかをほぼ正確に示している。徐は多くの書籍の編纂に携わる際、朝鮮、中国の史料に目を通す機会も多かったはずだが、両者の唱和詩を見る限り、書籍などから来るベトナムのイメージを詠い込んだ形跡は見られない。もっぱら自己の見聞・体験に依拠したということだろうか。⁹⁾

I-3 1481年の交流

今回の交流も朝鮮側にしか史料が残らない。1597年暮れから翌年初めにかけて行われた李暉光と馮克寛との交流について記した李の『芝峰先生集』巻8、「安南国使臣唱和問答録丁酉冬赴京時」には李と同時代の文人たち跋文が含まれるが、その中の李恒福(1556-1618年)が記した「題」の中で、李は、「権参判叔強」の詩帳の中にベトナム使臣の武佐という人物と朝鮮使臣の間で交わされた唱和詩が多数載ると記している。権参判叔強とは権健(1458-1501年)のことである。彼は奏聞使の書状官として1480年12月に出発、翌年2月頃に北京に滞在、同年4月に帰国している。

一方、1481年に明へ赴いたベトナム使節は阮文質、尹宏濬、武維教からなる一行だけなので、¹⁰⁾権健らが出会ったベトナム使節は阮文質らであったことは間違いない。

阮文質(1422年-?)は、太和6(1448)年の科挙に合格している〔Cao and Vō 1961: 21-32〕。

8) 例えば『高麗史』巻105、列伝巻18、鄭可臣伝、『高麗史節要』巻21、忠烈王16年11月の条、『高麗史』巻107、列伝巻20、閔漬伝等。ただし、この発言が鄭や閔などごく一部の官吏に限られたものなのか、当時の高麗王朝の知識人たち一般に流布していたものなのかは不明である。もっとも、この両者の発言は、元の大都でなされており、当時、高麗王朝は元朝と密接な関係を築いていたのに対し、ベトナムの陳朝が元朝に抵抗していたことなども時代背景として考慮すべきであろう。

9) この初の両使節の交流は後世、両使節の交流の象徴にならなかったが、両使節の交流についての記述が朝鮮側にしか残らないことや具体的な記述が少なすぎたためであろう。

10) 『全書』本紀巻13、洪徳11年11月18日の条。

尹宏濬、武維教の二人、更にこの時の交流で活躍した武佐については、ベトナム史料にも手掛かりがない。¹¹⁾

藤原利一郎氏は、阮文質らの北京滞在をランサン王国問題報告のためとし、成化17(1481)年8月19日から9月26日であったとする説を一方で述べながら、他方では6月頃北京へ到達していた可能性も指摘している[藤原1975: 300, 324; 1986: 146, 165]。一方、権健ら朝鮮の奏聞使は、成化17年2月には北京へ達していたので、権健らと阮文質らの間で交流が行われたのであれば、ベトナム使節の北京到着はさらにさかのぼり、成化17年2月前後には北京へ到着し、長期にわたって明に滞在していたこととなる。

ところで阮文質らベトナム使節は、同年、権健らより後に朝鮮から派遣された洪貴達、申従漢らからなる千秋使とも接触していた。¹²⁾ 洪貴達(1438-1504年)は字を兼善、虚白堂・涵虚亭などと号した。

洪貴達の文集『虚白亭文集』に載る「虚白先生年譜」によると、両使節が同年6月15日に接触していたこと、阮文質の字が判明する他、阮安と阮偉という人物も同行していたことが判明する。これら二人についても、ベトナム史料には記録が残らない。

次に両者の交流を記録した史料であるが、洪の『虚白亭文集』にはベトナム使臣との唱和詩が合計4首載る。まず、『虚白亭文集』巻1には、「安南使阮安恒甫の韻に次す」と「安南使阮文質淳夫の韻に次す」と題する七言律詩が一首ずつ載る。この他、『虚白先生続集』巻4には、「通州駅館にて安南使の韻に次す」(七言律詩)と「安南使阮偉挺夫の韻に次す」(五言律詩)と題する詩が載るが、ベトナム側の詩は載らない。

ところで、洪とともに書状官として千秋使に随行した申従漢(1456-97年)は、字を次詔、三魁堂と号した。申叔舟の孫にあたる。申もベトナム使臣武佐と交流していたようで、1518年に編纂された『続東文選』巻8、「七言律詩」中の「安南使武佐に贈る」(七言律詩1首)がそれである。ただし、ベトナム側の詩は載らない。

申従漢の詩には、「銅柱」という言葉が見える。また、李恒福の「題」中で、申はベトナム使節武佐の詩を「徴則之余烈信哉」と評価しているが、「徴則」は後漢王朝の圧政に対抗して独立運動を起こした女性、「銅柱」は徴則の反乱を鎮圧し、後漢王朝の南限としてベトナムの地に建てた柱のことで、いずれも『後漢書』に記される等中国の書籍の影響を感じる。¹³⁾

この後、ほぼ同時期にベトナム使臣黎時挙と朝鮮使臣曹伸の交流があったことが韓国の研究

11) 尹宏濬については、清水[2003: 67, 80の注9]を参照。

12) 千秋使の出發については、『成宗実録』巻128、12年4月乙卯の条に、また帰国については、『同書』巻133、12年9月癸酉の条に見える。北京滞在時については、『明憲宗実録』巻216、成化17年6月乙卯の条に見える。

13) 今回の交流も朝鮮側にしか記録が残らなかったこと、特に個人的な文集や詩集などに断片的にしか残らなかったため、前節の例同様両使節の交流の象徴とはなり得なかった。その一方で、これら文集等がベトナム使節についての貴重な情報を提供してくれる。

者によく紹介されるが、この交流は不確かな要素が多いため実際に交流が行われたのか疑問である [清水 2007: 118-128]。

I-4 1508年の交流

朝鮮の『中宗実録』巻18, 8年癸酉8月戊申の条には、1508年に謝恩副使として明へ赴いた李坵の言葉が載るが、その中に両使節の交流が記される。¹⁴⁾ 李坵は訪明の年を戊申年とし、これは1488年に当るが、実は、この年に李坵は使節として明へは赴いていない。また、この年にはベトナムも使節を北京に滞在していない。¹⁵⁾ この「戊申」は、「戊辰」の誤りであろう。「戊辰」は1508年に当る。李坵は同年4月、謝恩使の副使として明に赴き、同年9月帰国している。ベトナム側も前年11月に出発した複数の目的からなる使節団が北京に滞在していた。『中宗実録』によれば、両使節の唱和の中心は、書状官として同行した黄璋であった。ベトナム使節の側から多くの詩が朝鮮側に贈られ、それに対して黄璋が、詩を返答したようだが、黄璋のものも含め、この時の唱和詩は一点も記録されていない。

この後、ベトナムの黎朝は、1527年に権臣莫登庸により篡奪され一旦滅亡する。明はこの王朝交替を認めず、武力介入の危機にまで発展したが、1540年、莫登庸自身が中国国境の鎮南関に赴いて投降し、さらに国境付近の係争地を明に割譲した結果、明は出兵を中止し、翌1541年、莫氏政権は安南国王から格下げとなった「安南都統使」に任命され、以降歴代の莫氏は安南都統使の称号を世襲する。

この時期に明へ派遣された朝鮮使節は、帰国後、朝鮮国王からベトナム情勢とそれに対する明朝の対応を頻繁に尋ねられ、朝鮮国王はベトナム情勢に関心を示しているが [清水 2003: 76]、都統使に「格下げ」された莫氏政権が派遣した使節と朝鮮使節の交流は現在までのところ一例も確認できない。

14) 「特進官李坵曰：朴説之言至当。臣於戊申年赴京。中原人見我国之人，則雖兒童，皆以為文士而貴之。書状官須当扱送也。且其時安南国之人亦來朝。書状官黄璋適在行。安南之人多製詩送之。璋即次韻以答。其人深服。」とある。この交流については韓国の研究者の指摘により初めて知った [姜 2000: 70; 河 2004: 5]。

15) 韓国の河宇鳳氏は、この両使節間の交流を『中宗実録』の干支の通り、「戊申」の年(1488年)に比定する [河 2004: 5]。黎朝からは、洪徳19(1488)年の年末に複数の使節が派遣されたが(『全書』本紀、巻13、洪徳19年12月11日の条)、これら使節の北京到着は、翌年であるため、戊申年に朝鮮使節と接触することはあり得ない。また、この年の初めに済州島から中国の台州に漂着し、北京経由で陸路帰国した崔溥は『漂海録』を記録しているが、1488年4月の北京滞在時に琉球使節との接触は述べるものの、ベトナム使節については何も触れていない。一方、姜東燁氏は、両使節の交流を1508年のこととする [姜 2000: 70]。

II 1597年から翌年にかけての交流

18世紀以降、両使節にとっての交流の象徴は、1597年暮れから翌年にかけて北京の会同館で行われたベトナム使臣馮克寛と朝鮮使臣李睟光の交流であった。ベトナム、韓国ともに現在においても両使節の交流が必ず取り上げられる。これは両者が記録を残したことが最大の要因である。ただ、質量ともに李が残した記録の方が圧倒的に多い。

李睟光（1563–1628年）は字を潤卿、芝峯と号した。彼は1590、1597、1611年の計3度明へ赴いている。『朝天録』は1597年の訪問時の記録で、李の『芝峯先生集』に収められているが、『朝天録』は詳細な日記ではないため、李の中国における活動の詳細は不明である。

李睟光は、1590年に明朝を訪れた際、ベトナム使節と接触の機会があったが、交流を行わなかった。ただ、帰国後、宣祖国王からのベトナム使節の様子を問われた際に答えられなかった悔いが、後の李の馮克寛への積極的な行動の動機となった〔清水2002: 37〕。

万暦25（1597）年、李睟光は陳慰使として再び明を訪れる機会を得た。出発は同年8月、北京での儀礼参加は11月、帰国は翌正月ころだったことがわかる〔同所〕。また、『明神宗実録』により、この時の使節は李ら19名からなることがわかるが、使節の詳細な構成は李の『朝天録』にも記載がない。

一方ベトナム使臣の馮克寛（1528–1613年）は字を弘夫、毅齋と号した。若くから詩名を響かせていた。ベトナム側の入貢の目的は、復興したばかりの黎朝をベトナムの正統王朝として明に承認してもらうためであった〔同上書: 38〕。

1597年の交流で最も重要な史料となる李の『芝峯先生集』巻8に収められている「安南国使臣唱和問答録」（以下単に「問答録」と略す）については、現在の形になったのが1634年頃であることやその構成については、先学や前稿が論じた〔金1943: 235–242; 姜2000: 87; 清水2002: 38–39〕。

従来、両使節の交流といえは、李の「問答録」が利用されることが圧倒的に多かったが、『越南漢文燕行文献集成』第1冊には馮克寛の記録が3点掲載されている〔復旦大学文史研究院他2010: vol. 1: 55–212〕。このうち、『使華手沢詩集』及び『梅嶺使華手沢詩集』〔同上書: 71–152〕の2点に李睟光との唱和詩が載る。馮の『使華手沢詩集』〔同上書: 55–70〕には、李の「問答録」の冒頭に載る馮と李の七言律詩2首ずつ計4首の他、¹⁶⁾「問答録」には載らない馮克寛と李睟光の七言律詩が2首ずつ計4首、合わせて8首が載る〔同上書: 65–66〕。一方、『梅嶺使華手沢詩集』では、「問答録」の冒頭を飾る李と馮の間でかわされた七言律詩2首ずつ計4首を載せ、¹⁷⁾ その

16) 「問答録」の冒頭を飾る唱和詩は、李の「贈安南国使臣二首」と馮の「肅次芝峯使公韻」だが、馮の『使華手沢詩集』中ではそれぞれ「朝鮮使李芝峯呈安南耆目座下二首」「海南敬齋肅次朝鮮李使公韻」と引が記される。内容は大体同じだが、若干の文字の異同が認められる。

17) 『梅嶺使華手沢詩集』では、唱和詩の引は「朝鮮国使公李芝峯道人贈二律」「梅南敬齋馮公答」となっており、李の「問答録」とは文字の異同や欠字が見られる。

後「金羊逸士」なる朝鮮人と馮の間で交わされた七言律詩2首ずつ計4首合計8首を掲載する[同上書:98-102]。いずれも「問答録」の韻と符号している。つまり、李と馮が唱和した詩は「問答録」に掲載されたもの以外にも存在し、さらに馮は李以外の朝鮮人とも唱和詩を交わしていたことがわかる。ところで、金羊逸士なる人物については、韓国の姜東燁氏は、ベトナムの Bùi Duy Tân 氏の論文をもとに「金簫逸士」という人物に比定しているが[Bùi 1995: 44-45; 姜 2000: 89]、どのような根拠に基づいたのかは不明である。現段階では、金羊逸士（金簫逸士）の素性は明らかにできない。

なお、丁酉の日本の侵略により囚われた朝鮮人の趙完璧が日本の朱印船に乗り込み、1603年から連年3度ベトナムへ渡航した際、現地人から李が馮に贈った「安南国使臣に贈る二首」の中の「山出異形饒象骨」という「問答録」の冒頭を飾る李の句を示された話が、李の『芝峯先生集』巻8に載る。

また、馮克寛の「肅んで芝峯使公の韻に次す」は、李の「問答録」に載る馮が返した最初の唱和詩であるが、このうちの後半の1首は「朝鮮国使李暉光に答える」と題してベトナムで19世紀に編纂された『皇越詩選』巻5にも載る。

このように、馮は、「問答録」の冒頭で交わした李との唱和詩は記録したものの、李と交わした内容全てを記録した訳ではなかった。李が20近い馮との唱和詩や排律、馮に与えた序文、問答などほぼすべてを記録したのに対し、馮は李及び素性不明の金某との唱和詩16首だけを記載するだけであった。このような両者の間の差は、李の場合、国王への報告という大きな要因があったのに対し、馮にしてみれば、朝鮮使臣からのアプローチに対応しただけということに拠るのであろうか。

最後の北京行から帰国した李暉光は、1614年7月に、それまでの知見を集大成した『芝峯類説』を完成させるが、『芝峯類説』では「問答録」に記録された馮との対話や唱和詩の利用が大幅に後退し、「……交趾国は一名を安南で、すなわち盤瓠（虫から犬に変じたという伝説がある）や犬戎（中国の西方にいたという古代の異民族の蔑称）の子孫である。その性質はわるがしこく、髪を剪り、足ははだし、目はくぼみ、唇はとんがり極めて醜悪である。広州の人たちは未開の化け物のような容貌した人たちと見なしている。すなわち馬援（中国後漢を建国した光武帝時代に活躍した将軍。40年にベトナム北部で起こった徴側・徴式姉妹の反乱を平定。中国の南限の地を示すため、ベトナム国内に銅柱を建てた）の兵の子孫である。……」¹⁸⁾ や「……その世界は未開の人たちが雑居し、礼義を知らず、荒々しく闘いを好む、……」¹⁹⁾ といった中国でも評価の低い文献を引用して、ベトナムに対するよくない印象を示す内容となってお

18) 「……交趾国一名安南，乃瓠犬之遺種。其性姦猾，剪髮跣足，眇目昂喙極醜惡。廣人稱為夷鬼貌類人者，乃馬援兵之遺種也。……」。明の楊淙『事文玉屑』の一節。

19) 「……其俗夷獠雜居，不知礼義，獷悍喜闘，……」。鄭暉の『吾学編』に含まれる『皇明四夷考』の一節。

り、自身の体験を生かしきれていない〔清水 2002: 47-48〕。にもかかわらず両者の交流は、「問答録」に寄せた同世代の友人の「題」や「抜」などの影響により、すでに17世紀には朝鮮では、両使節間交流の代表的事例として引用され始める〔同所〕。

III 17世紀の両使節の交流²⁰⁾

III-1 1614年の事例

ベトナム史料である『歴朝憲章類誌』（以下『類誌』と略す）巻11、人物誌、徳業之儒、阮登の項には、癸丑の年に明に行った阮登が朝鮮使とも交流したと記す。阮登（1577年-?）は、前稿ではどの朝鮮使節接触したのかは明らかにできなかったが〔清水 2005: 40-43〕、この点について、ベトナム人研究者が近年論考を発表している〔Nguyễn 2009〕。

まず、両使節の基本的な情報を確認しておく。ベトナム使節の詳細は、弘定14（1613）年4月、万暦33（1605）年の進貢を兼ねた正使劉廷質、阮登、副使阮徳沢、黄琦、阮政、阮師卿等、2組の使節が明に派遣された。彼らは万暦42（1614）年の5月から9月頃まで北京に滞在し、弘定16年秋閏8月に帰国している。

次に、ベトナム使節の北京滞在が確実な万暦42年の5月から9月にかけて、北京に滞在していたと思われる朝鮮使節を中国史料から探すと、同年4月に滞在していた朴弘耆、李志完からなる恭聖王后冊封奏請使節と、同年7月に滞在していた閔馨男を正使とする進香使という2組の使節が確認でき、さらに1614年5月に呂祐吉を正使とする陳慰使が派遣されていた。実は、1614年には朝鮮王朝からは、上記の3使以外に千秋兼謝恩使節と聖節使鄭弘翼も派遣されており、²¹⁾ 1614年8月頃には、朝鮮からは少なくとも5つの使節が北京に滞在し、幾つかの使節はベトナム使節と同じ会同館に寝起きしていた。この時の記録として、千秋兼謝恩使節に書状官として随行していた金中清（1567-1629年）が記した『朝天録』『朝天詩』がある。²²⁾ 金中清は、字を而和。晩退軒、苟全などと号した。

金中清は、同年7月16日、前年末に出発した奏請使朴弘耆らとベトナム使節がすでに玉河館に入館していたことを記す。ここで言うベトナム使節は、阮登らの使節であったことは間違いない。金はベトナム使節についての風体や行動は記すが、両使節間の交流は記録していない。従って、阮登が接触した朝鮮使は、少なくとも金中清ら千秋兼謝恩使ではなかったと判断される〔清水 2005: 42-43〕。

20) 前章で取り上げた馮克寛と李睟光の交流に続く17世紀の両使節の交流については、ベトナム、韓国いずれの研究者もほとんど取り上げていない。

21) 金中清の『朝天録』の8月2日の条に、聖節使鄭弘翼一行の到着を記している。

22) 『苟全先生文集』別集に載る『朝天録』及び『苟全先生文集』巻1に載る『朝天詩』はともに、『燕行録全集』（林基中編、東国大学校、2001年）第11巻に収める。

ところで、2009年にベトナム人研究者 Nguyễn Đức Nhuệ氏が発表した論考は、ベトナム使節劉廷質が「朝鮮国使李斗峰に簡す」と題する七言律詩1首を李に対して贈ったことを紹介している [Nguyễn 2009: 21]。ただ、Nhuệ氏は、この詩の出所を明らかにしておらず [ibid.: 23の注6]、李斗峰という人物についての考察も行っていない。李斗峰は本名を李志完(1575–1617年)といい、斗峰は号である。李暉光と親友であった李尚毅の息子である。上述のように李志完は、朴弘耆とともに冊封奏請使節として1613年12月に漢城を出発し、翌年夏頃に北京に滞在中であった。この頃にベトナム使節と接触があったのだろう。一方、劉廷質(1566–1627年)は、『類誌』巻8、人物誌、勲賢之輔の項に略歴が紹介されるが、朝鮮使節との交流についての記載はない。Nhuệ氏は両者の交流を1613年とするが、上述のように1614年の誤りである。現段階ではNhuệ氏も劉廷質が李志完に宛てた詩を1首紹介するにとどまり、また朝鮮側にも記録が残らず、交流の詳細は不明であるが、李志完の父李尚毅が李暉光の友人であったことも両使節の接触の一因であったとも考えられそうである。

III-2 1691年の事例

前節の両使節の交流からしばらく両者の交流は途絶える。中国、朝鮮、ベトナムのいずれもが王朝交替や戦乱といった政治的混乱が生じたことが最大の原因である。特にベトナムでは黎朝の復興に功績のあった実力者鄭氏と阮氏の間で内戦状態となる一方、北部の高平付近には黎朝に追われた莫氏の残党が活発に活動するなど分裂状態に陥っていた。しかし鄭氏の政治力、軍事力を後ろ盾とする黎朝は、中国の王朝交替の間隙をぬって、清朝から再び「安南国王」の承認を得、更に莫氏を1683年に制圧した結果、清と黎朝との関係はようやく明の時代の旧例に復することとなった [山本 1975: 365–404]。

このように国際関係が安定してから、両使節の交流が再開されるが、1691年の交流については、拙論で紹介されるため、以下概略のみ示す [清水 2005]。

まず朝鮮使節は、肅宗17年閏7月7日に漢城を出発した正使閔黯、副使姜碩賓、書状官李震休からなる謝恩兼陳奏使であった。

一方のベトナム使節は、『同文彙考』（以下『同文』と略す）補編、巻3、使臣別単「辛未 謝恩兼陳奏行書状官李震休聞見事件」に「阮名儒、阮貴徳、副使阮廷策、陳疇」と正副使4名の名を記録しており、ベトナム史料である『全書』続編、巻1、正和11(1690)年の条にある4名と一致する。²³⁾ この時期のベトナムは3年ごとの貢物を2回分まとめて6年に一度使節を派遣することになっていたため、正使、副使それぞれ二人ずつの使節が派遣された。『清聖祖実

23) 陳荊和氏によれば、副使阮廷策の名は、A6本と呼ばれる『全書』では阮廷榮に、『欽定越史通鑑綱目』（以下単に『綱目』と略す）では、阮進策とするとしている（校合本『全書』（下）1018ページ）が、『同文』の記述から阮廷策が正しいのではないだろうか。

録』巻153, 康熙30年9月丙申の条から, ベトナム使節は1691年9月には北京に滞在していたことは確実である。

両使節の交流の記録は朝鮮史料にしか残らない。上記『同文』には, 康熙30(1691)年9月頃と思われる両使節の交流が詳細に記される。それによれば, 両使節の交流は, 礼部での朝貢儀式の際に偶然一緒になったことから訳官を通して行われた。また記録されるベトナム使節の言によれば, すでに何度か顔を合わす機会があったという。

朝鮮使節の書状官であった李震休は, ベトナム使節から聞いたベトナムの官制や科挙の制度が中国と異ならないことやベトナムから北京までの旅程, 帰国時期についても報告している。概ねベトナム使節の礼節の良さについて述べており, 全体的に好意的な報告となっている。

一方, ベトナム使節から朝鮮使節への質問は, 科挙に関するもののみである。

最後に正使閔黯とベトナム使節との間で交わされた唱和詩を載せている。閔黯が七言律詩を贈ったのに対し, ベトナム側は個人ではなく共同で作成した七言律詩を返している〔清水2005: 46-47〕。

朝鮮使節は同年12月に帰国し, 正副使が国王の引見を受けた際, 閔黯と姜碩賓はベトナム使節との接触について報告しているが, これは『肅宗実録』巻23, 17年辛未12月乙酉の条に載る。朝鮮国王からの問いに対して, 閔黯はベトナム使節の服装, 習俗や礼儀をよく知ること等, 『同文』とほぼ同内容の報告を行っている。そして, 李睟光の例にならいベトナム使臣と詩の交換を行ったが, ベトナム使節は文字をよく知っていると結ぶ。実際に交流した人物から過去の両国使節の交流の先例として李睟光と馮克寛の交流が言及された最初の例である。

続けて1697年にも両国使節の門で交流が行われたとベトナムの研究者が指摘しているが, 史料的に確認ができないことから, 実際に交流があったか不確定である〔清水2007: 130-134〕。

IV 18世紀の事例を中心に

IV-1 1704年の交流

1704年に両国使節で行われた交流はベトナム, 朝鮮双方の史料には現れず, 中国の詩集のみが伝える珍しい例である。清朝で編纂された『皇清詩選』には, ベトナム人の詩が3人分4首載る²⁴⁾が, この内の2人分3首は前章で紹介した阮貴徳, 陳璣のもので, 残る1首は何宗穆(1653年-?)のものである。『皇清詩選』巻24には, 何の「朝鮮李鴻臚に贈る」という七言律詩1首とそれに応えた朝鮮人李晟の「安南何鴻臚の歩の原韻に答える」という七言律詩1首が載る。この両者の交流について触れているのは, 現在のところ韓国の朴現圭氏のみである〔朴

24) 『皇清詩選』の成立及び掲載される朝鮮人の詩については, 朴現圭氏の論考が詳しい〔朴2004: 107〕。

2004: 105]。ただ、朴氏は、何宗穆の引に基づき両者の交流の日付及び場所を「康熙36年肅宗30年17402月13日在京師故宮の午門外」としているが[同所]、これは間違いである。何宗穆の引は「康熙甲申二月十三日、朝鮮、安南二国に鞍馬銀帛を賜う。午門の外に於いて相い遇いて賦を贈る」とある。康熙甲申は康熙43年、すなわち1704年である。²⁵⁾

この時のベトナム使節の構成は、正使は何宗穆、阮珩、副使は、阮公董、阮当褒(起)からなっており、永治23(1702)年閏7月にベトナムを出発した。ただ、ベトナム使節の北京滞在時期を具体的に示す史料は上記の何宗穆の引しかなく、帰国時期も確認できない。

他方、朝鮮使臣の李晟に関しては、朴氏も詳細な検討を行っておらず[同上書: 103, 105]、詳細は不明である。ただ、1704年2月に北京に滞在していたと思われる朝鮮使節は次の2使節である。1つは康熙42年9月21日に発した正使砺山君李枋、副使徐文裕、書状官李彦経らかなる謝恩使、もう1つは同年10月28日に発した正使徐宗泰、副使趙泰東、書状官金栽らかなる三節年貢使である。両使節は記録を残していないため、李晟がいずれの使節に参加していたのかは不明だが、何宗穆の引から朴現圭氏は、両使節が謝恩の品を受け取る際に一緒になったと判断しており[同上書: 105]、そうすると李晟は、正使砺山君李枋をトップとする謝恩使に参加していたのかもしれない。

IV-2 1719年の交流

この交流は、ベトナム側にしか記録が残らない初の例である。ベトナムの『皇越詩選』巻5に、ベトナム使節阮公沆(1680-1732年)が朝鮮使節兪集一、李世瑾に宛てた詩「朝鮮国使兪集一、李世瑾に簡す 二首七言」が載り(ともに七言律詩)、²⁶⁾ベトナム、韓国の研究者は、1597年から翌年の馮と李以来の両使節の交流として扱ってきた[Bùi 1995: 48-49; 姜 2000: 89; 清水 2000: 21; 朴 2005: 299-300; Nguyễn 2007: 3-12]。

阮公沆は、阮伯宗らとともに前ベトナム国王の死去の報告と新国王の求封のため、永盛14(1718)年4月にベトナムを出発し、翌年9月に帰国している。『清聖祖実録』によれば、阮公沆らが、康熙57(1718)年10月24日頃に北京に滞在していたことは確実だが、阮公沆らが北京に到達した時期には、朝鮮側の使節はまだ漢城を出発していなかった。

一方、朝鮮使節は兪集一(1653-1724年)を三節年貢正使、李世瑾(1676-1749年)を同副使として康熙57年11月1日に北京へ派遣された。『清聖祖実録』巻283康熙58年正月甲戌朔の条に、兪ら朝鮮使節が北京で宴を賜った記事があることから、この頃に両使節の接触があったものと思われる。

25) 何宗穆の詩はこの他、徐世昌により編纂された『晚晴簃詩匯』巻200にも「贈朝鮮使臣」と題して同文の詩が載るが、引の内容は『皇清詩選』のものと異なり、清の呉暲が朝鮮使臣に代わって「答詩」したとある。

26) 『晚晴簃詩匯』巻200にも同題、同文の阮公沆の詩が載る。

従来、この両使節の交流は、『皇越詩選』により知られ、阮公沆が朝鮮使節に贈った詩しか知られてこなかったが、『越南漢文燕行文献集成』第2冊には、阮公沆の『往北使詩』が掲載される〔復旦大学文史研究院他 2010 vol.2: 1-38〕。この中には阮、兪、李の七言律詩が、4首ずつ計12首が載る〔同上書: 28-33〕。ただし、唱和の日時や場所の記載はない。阮の4首のうち2首は、『皇越詩選』巻5の「朝鮮国使兪集一、李世瑾に簡す 二首七言」と同じである。

この後1748年にも両使節間で交流があったとベトナムの Nguyễn Minh Tường 氏は指摘しているが〔Nguyễn 2007: 4〕、この交流の記録には不確定な要素が多く、実際に交流があったか疑わしい点がある。この交流はVI章で取り上げる。

IV-3 1760年から1761年における交流

1761年にベトナム、朝鮮両使節で行われた交流は、李晬光と馮克寛の交流に匹敵するものとして扱われ、特にベトナムでは古くから両国の交流の象徴として扱われてきた〔Niculin 1987; Woodside 1988: Preface〕。近年では、ベトナムの研究者が両使節の交流について研究ノートや論考を発表している〔Nguyễn 1999: 79-84, Nguyễn 2007: 7-9, Nguyễn 2009: 3-17〕。一方、韓国の研究者はほとんどこの交流を取りあげてこなかった。このようなベトナム側に偏った研究状況の原因は、朝鮮側の史料を発見できなかったからである。韓国の研究者にこの交流が知られるようになった要因は、主として Bui 氏の論文に拠る所が大きい〔Bui 1995〕。

まず、ベトナム使節は、正使は陳輝泌（1710年-?）、そして黎貴惇（1726-84年）、鄭春澍（1704年-?）の二人が副使であった。

朝鮮側の使節は、正使洪啓禧（1703-71年）、副使趙榮進、書状官李徽中らからなる三節年貢使で、乾隆25（1760）年11月2日に出発し、翌年4月6日に復命していることが『同文』補編巻7・使行録からわかる。正使の洪は1748年に通信使として日本にも派遣されている。

次に両使節が残した史料についてであるが、ベトナム側では、副使の鄭が『使華学歩詩集』という詩集を記したようだが、²⁷⁾ベトナムの漢喃研究院刊行の漢籍目録にはこの書名は見いだせない。ベトナム側で両使節の交流を知ることが出来る史料は、いずれも黎貴惇が残した様々な記録である。中でも『北使通録』という記録を黎貴惇は残しており、全4巻からなるはずのこの記録は『越南漢文燕行文献集成』第4冊に収録されている。使節の構成や出発から帰国までを日記風に記録しており、極めて貴重な資料であるが、北京滞在中の事を記した巻2、3の原本が消失しており、序文に朝鮮使節との接触が記載される程度で朝鮮使節との接触の詳しい様子を知る手がかりにならない。

これまで、多くの研究者が利用してきたのは、黎貴惇の『見聞小録』巻4、「篇章」中の記載

27) 『類誌』巻43文籍誌、詩文類。

である。この中で、黎は、日時は不明だが、ベトナム使節と朝鮮使節の間で交わされた会話や書簡の一部を載せる。²⁸⁾

一方、Nguyễn Minh Tuấn 氏は、出典を明らかにしないまま黎貴惇と洪啓禧、李徽中の中で交わされた4つの詩を取り上げている [Nguyễn 1999]。これらは、『越南漢文燕行文献集成』第3冊に収録される黎貴惇の『桂堂詩彙選』の中の4首を紹介したものと思われる [復旦大学文史研究院他 2010 vol.3]。『桂堂詩彙選』の中には、「朝鮮国使洪啓禧、趙栄進、李徽中に東す」「洪啓禧の和詩を付して録す」「李徽中の和詩を付して録す」「前韻に依り朝鮮使に送る二体」「洪啓禧の和詩を付す」「李徽中の和詩を付す」と6題の七言律詩計7首が載るが [同上書: 65-70]、Tuấn 氏はこの内、黎の「前韻に依り朝鮮使に送る二体」と洪の「洪啓禧の和詩を付して録す」、李の「李徽中の和詩を付す」の計4つの詩を紹介していたことが判明する。ただ、字句に異同がある他、洪啓禧を「鴻啓禧」とする等、異なるテキストを利用した可能性がある。²⁹⁾

他方、朝鮮使節の記録は、『同文』補編巻5、使臣別単に載る正使洪啓禧、副使趙栄進の簡単な復命しなく、この事が韓国の研究者が両使節の交流を見落としてきた要因である。ところが、最近刊行された『燕行録選集補遺』上巻には、この時の書状官李徽中の息子である李商鳳（後に李義鳳と改名）の手による『北轅録』が掲載されており、『燕行録選集補遺』下巻には同じく李商鳳によるハングルで書かれた『서원록』も掲載されている。ハングル版の詳細な検討は今後の課題だが、漢文版の『北轅録』には使節の構成、毎日の出来事が克明に記載されており、特に1761年初頭のベトナム使節との交流はベトナム側の黎貴惇の『見聞小録』の記載より遥かに詳細である。『北轅録』の内容の検討や『見聞小録』との比較は別稿にゆずるが、李商鳳はベトナム使節の宿舎まで赴き、儒学の隆盛の程度やベトナムで有名な儒者について等、筆談や通訳を利用しながら、様々な質問を行っている。今後、1761年の両使節の交流を検討する際には、この『北轅録』を利用しなければならない。

IV-4 1767年の交流

この交流については、現在までのところ、ベトナムの Nguyễn Minh Tường 氏など、ベトナム側の研究者だけが検討している [Nguyễn 2007: 4]。Tường 氏の注によれば [ibid.: 11 の注6]、ベトナム側の史料としてはいくつかの典拠があるようだが、いずれも筆者は未見である。

『全書』によれば、ベトナム使節は、正使阮輝儻、副使黎允伸、阮賞らからなり、景興26(1765)年に出発した記述はあるが、出発日時及び帰国の時期の記載はない。ただ、『清高宗実録』によれば、乾隆32(1767)年1月29日に歳貢の宴を北京で賜っていることがわかる。ところで、

28) この点についてはすでに前稿で触れたので、詳しく取り上げない [清水 2000: 18-21]。

29) 洪啓禧はベトナム資料中では「鴻啓禧」として記されることがあるが、これは、阮朝(1802-1945年)第4代皇帝の嗣徳帝の諱を避けたためである。

正使の阮輝儻は、『奉使燕京総歌並日記』という記録を残しており、『越南漢文燕行文献集成』第5冊に掲載される〔復旦大学文史研究院他 2010 vol.5: 1-162〕。これによれば、ベトナム使節は景興26年10月に出発し、翌28年11月末に帰国したことがわかる。

一方、Tuồng氏は朝鮮使節の具体的な名前を挙げていないが〔Nguyễn 2007: 4〕、『同文』補編巻7・使行録から、乾隆32年の正月に入貢した朝鮮使節は、英宗42(1766)年10月22日に出発した正使咸溪君李樵、副使尹得養、書状官李亨遠らからなる三節年貢兼謝恩使しかない。

朝鮮側にはこの時の記録が残らず、一方のベトナム側の記録は上述した阮輝儻の『奉使燕京総歌並日記』しかない。そこには朝鮮使節と唱和を交わしたという記述は見出せず、阮輝儻が乾隆31年12月23日に朝鮮使節と同等の礼を行いたい事を礼部に進言した結果、許しを得て、翌年元旦、朝鮮使節とともに乾隆帝に拝謁したことが記されているだけである。また、『清高宗実録』にも両使節に対して等しく朝貢をねぎらう宴を賜った記事が載るが、あるいはこの時に接触があったのだろうか。

IV-5 1773年の交流

この1773年の交流については、1760年から翌年にかけて朝鮮使節と交流したベトナム使臣黎貴惇が著した『見聞小録』巻4、篇章の記述と『皇越詩選』巻6に段阮俶が朝鮮使節に贈った七言律詩「朝鮮国使尹東昇、李致中に饒る」1首が残ることから、³⁰⁾ 1773年に両国の使節間で交流があったことがわかるが〔清水 2000: 20, 23〕、朝鮮側には記録が残っていない。

『見聞小録』の著者黎貴惇は、黎と科挙及第の同期生でもあった阮暉(1728年-?)から、かつて北京で交流のあった李徽中の甥である李致中と北京で交流したとの報告を受け、『見聞小録』に両使節の交流を記載したようである。この交流については、韓国の河宇鳳氏と朴現圭氏が〔河 2004: 11; 朴 2005: 300-301〕、ベトナムの研究者では、Nguyễn Minh Tuồng氏が取り上げている〔Nguyễn 2007: 4〕。ただ、河氏と朴氏の二人は『皇越詩選』の唱和詩のみを紹介し、一方、Tuồng氏は、『見聞小録』の内容しか取り上げていない。

ベトナム使節は、『全書』の記載から景興31(1771)年内に出発したことはわかるが、正確な出発、帰国日時ともに記載がない。正使は段阮俶(1728-83年)、副使は武輝斑、阮暉らから構成されていた。

朝鮮使節は、正使は順義君李烜、副使は尹東昇、書状官李致中からなる進賀謝恩兼三節年貢使で、出発は英宗48(1772)年11月1日であった。

従来、この交流については、上述のベトナム史料2点だけが知られるのみであったが、ベトナム側の副使であった武輝斑が残した『華程詩』という詩集上下2巻が残っていたことが『越

30) 19世紀後半に清朝徐廷旭により編纂された『越南輯略』「詩選」にも同題で同文が載る。

南漢文燕行文献集成』第5冊に掲載されたことから判明した〔復旦大学文史研究院他 2010 vol.5: 235-363〕。この内、下巻には「朝鮮国使に贈る詩并せて引」と題する武の引と七言律詩1首を、さらに「朝鮮国使が答え贈る詩并せて引二首を付す」として副使尹東昇の2つの引と書状官李致中の七言律詩2首を載せるが〔同上書: 353-356〕、『皇越詩選』が載せる正使段阮俶が朝鮮使節に贈った詩は武の『華程詩』には載らない。この他、後述するように、1790年に乾隆帝の八旬万寿節の際に両使節が交流した際、ベトナム側の副使であった武輝瑠が『華程後集』で1773年の両使節の交流について触れており、朝鮮使節李致中の詩の1節を紹介している。『華程後集』の撰者の武輝瑠の父は、1773年の交流の際のベトナム副使武輝瑠であったと思われる³¹⁾ 武輝瑠は父から北京での両使節の接触の話を知っていたのであろう。

IV-6 1779年の交流

この交流は、ベトナムでは Bùi Duy Tân, Nguyễn Minh Tường 両氏が触れているが〔Bùi 1995: 50; Nguyễn 2007: 4〕、詳細な検討は行っていない。一方、韓国では、河宇鳳氏が両使節の交流の簡単な紹介を行っている他〔河 2004: 11〕、朴現圭氏が詳細に検討する〔朴 2005: 301-303〕。

前稿ではベトナム使節は、『綱目』正編巻45、景興38(1777)年12月の条から武陳紹が正使として派遣された事以外、使節の構成を明らかにできなかった〔清水 2000: 20-22〕。この使節は、翌年秋頃には北京に入っていた可能性がある〔山本 1975: 690〕。

一方、朝鮮使節は、『同文』補編、巻7から乾隆43(1778)年9月29日に漢城を出発した正使河恩君李珖、副使尹坊、書状官鄭宇淳からなる謝恩使であることは間違いない。ベトナムの『皇越詩選』巻6には胡士棟作の「朝鮮国使李珖、鄭宇淳、尹坊の国に回るを贈る」七言律詩1首が載るが、「李珖」とは「河恩君李珖」のことだろう。

ただ、この時の両使節の北京滞在に関する記載は『清高宗実録』からは確認できない。

朝鮮側の史料としては、『皇越詩選』と同文の詩が朝鮮の柳得恭(1748-1807年)の『並世集』巻2に載る。³²⁾ この詩には「戊戌の立春の後一日、朝鮮国使臣尹判書に奉呈す」という題が付く。ところで、この詩の題には問題がある〔清水 2000: 22〕。「戊戌」は1778年に当たり、この年の立春には両使節とも北京には到着しておらず、「戊戌立春」での両使節間の交流は不可能である。韓国の姜東燁氏は、ベトナム使節が接触した朝鮮使節を、正宗元(1776)年11月3日に出發した李澥を正使とする進賀兼謝恩使とし、両使節の接触を1778年と解釈するが〔姜 2000: 90〕、朴現圭氏も指摘するように〔朴 2005: 302〕、これは誤りである。柳得恭自身、この時の朝鮮使節には参加しておらず、いわば間接的に情報を得たため、本来「己亥(1779年)」とす

31) 『越南漢文燕行文献集成』第6冊に載る武輝瑠の『華原随歩集』の解題で中国の陳正宏氏は、武輝瑠の父は武輝瑠とする〔復旦大学文史研究院他 2010 vol.6: 292〕。

32) 『越南輯略』「詩選」にも作者を吳士棟と誤り同題で同文が載る。

べきところを誤ったのだろう。

ベトナム史料としては、上述の『皇越詩選』以外に、『越南漢文燕行文献集成』第6冊に、ベトナム使臣胡士棟の手になる『花程遣興』が掲載されていることが判明した〔復旦大学文史研究院他 2010 vol.6: 1-72〕。この冒頭の題文によれば、胡士棟が副使であったこと、出発が戊戌（1778）年正月、北京到達は上述のように「仲秋」、翌年の秋に帰国したことがわかる〔同上書：1〕。内容は時系列に作成された詩がほとんどで、この中に「朝鮮使の国に回るを贈る」「又三陪臣への詩」「他に和し答える三律」「海東李珣拜す」「海東鄭宇淳拜す」と両使節で交わされた七言律詩各1首ずつ計5首が載る〔同上書：49-51〕。『皇越詩選』のものは「朝鮮使の国に回るを贈る」と同文である。また、『花程遣興』には使節の復命がのるが、ここには「陪臣武陳紹、胡仕棟、阮仲璫等謹んで啓するに恭しく謝悃を伸べる事の為にす」とあり〔同上書：59〕、ベトナム使節の三使の構成がわかり、前稿ではこの使節に参加していたのか判断できなかった阮仲璫（1724-86年）が随行していたことが判明した。さらに、柳得恭の『並世集』巻2には胡士棟の唱和詩に続けて阮仲璫の「朝鮮国使尹判書に奉呈す」と題する詩が載る。前稿では、詩を贈った「尹判書」が誰なのか特定できなかったが、柳得恭の『並世集』に載る阮仲璫の「朝鮮国使尹判書に奉呈す」が胡士棟の『花程遣興』中の「又三陪臣詩」と同文であることから、「尹判書」が尹坊であることが明らかとなった。

柳得恭の『並世集』巻2には更に3名のベトナム使臣の詩が載るが、それは次章で扱う。

V ベトナム西山政権と朝鮮使節の交流

V-1 1790年の交流（1）

18世紀末、ベトナムでは、中部から興った西山政権が勢力を拡大し、1788年、約300年続いた黎朝は皇帝を称した阮文恵の西山政権に取って替わられた。この王朝交替を認めない清朝は軍事介入を行うが、1789年正月、清朝は西山軍に撃破され、失敗に終わった。

こうした状況にもかかわらず、西山政権と清の関係改善は迅速に進められ、西山政権は、同年4月、阮文恵の親姪と名乗る阮光顕を正使、阮有嘯、武輝璫らを副使とする請降使を派遣し、³³⁾ 同年7月末に熱河で乾隆帝に謁見、翌年7月の乾隆帝の八旬万寿節への安南国王自らが出席するとの条件で安南国王に封じられ、政治的に決着する。この時期の朝鮮使節はベトナムで「篡弑之變」が生じ、その後西山政権が安南国王に承認されるまでの様子を詳細に報告し、盛んに情報収集を行っていたことがわかる〔伍 2007: 185-220〕。

33) 阮光顕は経歴が不明で、当時から実際は「文」という姓であり、阮文恵の甥ではないという情報もあった〔鈴木 1967b: 84-85; 山本 1975: 476の注147〕。なお、この時のベトナム使節副使であった武輝璫が撰じた『華原随歩集』が『越南漢文燕行文献集成』第6冊に収録されている〔復旦大学文史研究院他 2010 vol.6: 289-343〕。

清朝は1789年に西山政権をベトナムの正統政権と承認し、同年10月、承認に対する謝恩使が西山政権から派遣され、1790年初頭に北京で朝鮮使節と邂逅することとなった。この交流は、拙稿以外に、韓国の河宇鳳氏が紹介している〔河2004: 11〕。

朝鮮使節は、李性源を正使、趙宗鉉を副使、書状官成種仁からなる進賀謝恩兼三節年貢使で、乾隆54（1789）年10月16日に漢城を出発した。

一方、同年10月、清朝の使節がハノイまで赴いて阮文恵を安南国王に封じた後、それに対する答礼として、西山政権は、阮宏匡を正使、宋名朗、黎梁慎を副使とする謝恩使、陳登大を正使、阮止信、阮倅からなる進貢使を同時に北京へ派遣した。ベトナム・朝鮮両使節は乾隆55年正月、北京で直接顔を会わせている。乾隆55年初春に乾隆帝主催の宴が開かれた際、朝鮮使節やベトナム使節等が一堂に会し、唱和詩を交わしたことを清朝の文人紀昀が記録している〔藤塚1975: 66-69〕。³⁴⁾ ベトナム使節の使臣たちはいずれも西山政権下で要職にあったことを示す肩書きを有しており、朝鮮使節らとも詩を唱和するなどかなりの教養人であったらしいが、いずれも詳しい経歴などは不明である。朝鮮側の李性源、趙宗鉉及びベトナム使節6名の七言律詩各1首ずつは、「恭しく御製の朝鮮、琉球、安南諸国の使臣に賜う詩に和す」と題して乾隆帝が提示した韻をもとに作詩されており、これは『晚晴簃詩匯』巻200に全て載る。³⁵⁾

V-2 1790年の交流 (2)

乾隆55年夏、予定通り乾隆帝の八旬万寿節が行われ、この場でも両使節による交流が行われた。³⁶⁾

朝鮮からは進賀兼謝恩使が派遣された。正使の黄仁点（1740-1802年）は、生涯6度にわたり北京へ赴き、八旬万寿節参加時の燕行は5回目であった。副使の徐浩修（1736-99年）は、乾隆41（1776）年にも赴燕している。書状官は李百亨（1737年-?）で、このほか、この使節には実学者として有名な柳得恭（1749-1807年）や朴齋家（1750-1805年）らも随行し、それぞれが記録を残している。朝鮮使節は正宗14（1790）年5月27日に漢城を出発し、7月15日に熱河に達した。

一方ベトナム使節は偽の安南国王を代表とし、³⁷⁾ 呉文楚、鄧文真、潘輝益、武輝瑯、武名標、阮進祿、杜文功など総勢184人からなっていた。上記以外の人物の名も清朝や朝鮮の記録、更

34) この時の様子は清の紀昀の『紀文達公遺集』巻10に載る。

35) この他、朝鮮使節は、首訳の張濂の報告（『正祖実録』巻29, 14年庚戌3月丁未の条の「首訳張濂別単」）や書状官成種仁の報告（『同文』補続、使臣別単「己酉 謝恩兼冬至行書状官成種仁聞見事件」）を残しているが、両使節間での交流は報告していない。これらの情報は伍躍氏も指摘する如く清朝の官吏から入手したものと思われる〔伍2007: 207-214〕。

36) 詳細については拙稿の他、韓国の姜東燁氏や河宇鳳氏〔姜2000: 90-92; 清水2001; 河2004: 11-14〕、ベトナムのNguyễn Minh Tường氏も触れている〔Nguyễn2007: 4〕。

37) この替え玉の安南国王事件については、鈴木〔1967a; 1967b〕、山本〔1975: 437-492〕に詳しい。

に『越南漢文燕行文献集成』などに見出すことができる。ただし、ベトナム使節の使臣たちは、偽の安南国王となった阮文恵の甥という范公治を始め、そのほとんどの人物の経歴は不明である。この中で、武輝瑠（1749年-?）は前年7月に清朝を訪れた阮光顕を正使とする請降使にも加わっており、2年連続で赴燕したことになる。彼も「故黎臣」であったこと以外に詳しい経歴はわからない。この中で経歴でよくわかるのは、黎朝時に高官を歴任した潘輝益（1751-1822年）くらいである。

V-3 1790年の交流(2)——朝鮮史料について

この乾隆55年夏の遣使について、朝鮮使節に随行していた書状官の李百亨が両使節の会話を簡単に記録しているが、³⁸⁾ 両使節の交流を記した記録としては、副使徐浩修の日記『燕行紀』が非常に詳細である。³⁹⁾ 徐には、別に彼自身の序文を付した全4巻からなる『熱河紀遊』があるが、⁴⁰⁾ その内容は『燕行紀』とほぼ同文である。

徐の記録よれば、両使節の本格的な交流は乾隆55年7月16日、熱河に始まる。安南国王から朝鮮正使の黄仁点に対し、今までにベトナム、朝鮮両国王が自ら中国へ入朝した例がないことを語り、副使の徐浩修に対しては、日本の情勢をある程度知っていたことを披露している。

続いて、ベトナム使節の潘輝益と徐浩修が会話を始める。ここでは徐が、馮克寛と李暉光の交流について触れ、李と馮の詩の一節をそらんじている。⁴¹⁾ 今度は、潘が1760年から61年にかけての黎貴惇と洪啓禧らの交流について触れており、潘も過去の両国使節の交流の話を知っていたことになる。この後、徐は潘にベトナムの領域、気候、特産品などについて質問し、会話は終わる。その後、徐は黎朝から西山政権への王朝交代の過程について記録するが、その内容は概ね、先行した使節の報告内容と同じで、徐自身は、直接潘輝益に対して、ベトナムでの王朝交替に関する質問をしていない。

この他、徐は、ベトナム使節が1790年3月にベトナムを出発し、7月に熱河に到着したこと、ベトナムならではのさまざまな貢ぎ物を捧持し、演劇を上演する俳優なども同行させていたことを記録している。また、乾隆帝が安南国王に対し、破格の待遇を示していることも記録している。

38) 『同文』補続、巻7、使臣別単「庚戌 聖節進賀兼謝恩行書状官李百亨聞見事件」。

39) 拙論も本稿も1960年に韓国の成均館大学校から出版された『燕行録選集』（上）に所収の『燕行紀』を利用したが、同テキストは2001年に韓国の東国大学校から出版された『燕行録全集』第50、51冊にも収録される。

40) 『熱河紀遊』は2001年に韓国の東国大学校から出版された『燕行録全集』第51、52冊に収録される。『熱河紀遊』の序文は「癸丑」の年（1793年）に記されており、徐は、『燕行紀』を記した後、これをもとに『熱河紀遊』を清書した可能性が高い。

41) 李の詩の一節は「贈安南国使臣二首」のもので、馮のものは「肅次芝峯使公長律十韻」の一節。ともに『芝峯先生集』巻8の「問答録」に載る。

徐は潘輝益、武輝瑯らとその後も連日顔を合わせていたようで、後日、唱和詩を取り交わすことになる。その一方で、徐は清朝の高官の中にベトナムの王朝交替を歓迎していない人々がいることを記録しており、徐自身もベトナムの王朝交替を歓迎していなかったようである。その一方で、阮文恵の容姿は「清秀」で、儀礼での態度も「沈重」と記録するなど讃辞を贈っている。その他、ベトナム使節が「篡奪」の汚名を払拭しようとしている様も記している。

7月19日には両使節の間で詩の唱和が交わされる。徐の記録には、潘輝益と武輝瑯⁴²⁾が徐に贈った七言律詩が1首ずつと、それに対する徐の詩2つが載る。この後、徐は、ベトナム使節が8月24日に帰国の途についていることを記している。

徐浩修は西山政権が「篡奪」という手段による王朝交替を行ったことで、中華世界の中の一員としての正統性に抵触する微妙な問題を抱えていることに気付いていたが、批判も含めてあえて自己の意見は記していない。一方、ベトナムに関する風俗や制度、ベトナム使臣たちの持つ世界情勢などの情報量は、李晬光が馮克寛との問答から得たベトナムに関する情報に比べ格段に豊富である。

この時の両使節の交流を示す朝鮮側の史料はこれだけではない。上述したように朝鮮使節には柳得恭、朴齋家も随行しており、彼らもそれぞれ記録を残している。⁴³⁾

まず、柳得恭の記録から見てみる。柳の記録『灤陽録』巻1には「安南諸王」という一節があり、西山政権の「篡奪」による王朝交替の話が主流を占めている。「安南諸王」の記述から、柳も徐浩修同様、ベトナムでの「篡奪」による王朝交替を快く思っていなかったようであるが、この評価は、清朝からの情報による影響も大きかったであろう。また、熱河で潘輝益と武輝瑯らと七律1首の唱和詩を交わし、更に円明園で五律2首の唱和詩を潘らに贈っている。この詩には、段阮俊、陶金鐘、張嘉儼というベトナム使臣の名も出てくる。

『灤陽録』で柳が紹介する潘輝益の唱和詩は、徐の記録で紹介している詩と同じである。また、彼は『並世集』という詩集を残しているが、その巻2に『灤陽録』で柳得恭が紹介したベトナム使節の唱和詩を「潘輝益 吏部尚書 朝鮮国進賀使徐判書に奉呈す」「武輝瑯 号は一水居士。工部尚書、灤沢侯 朝鮮国進賀使徐判書に奉呈す」と題し、ほぼ同文のまま載せる。ここでいう「徐判書」とはもちろん徐浩修である。この他、同書にはベトナム使節の一員であった陶金鐘が朝鮮使節の一員であった朴齋家に贈った「敬んで朝鮮国朴檢書に和す」と題する詩を載せる。ただ、この陶金鐘なる人物も、柳は「政省内書」という肩書を記すのみで、ベトナムにも記録が残らず、詳細は不明である。陶が唱和した「朴檢書」とは次に取り上げる朴齋家のことだろう。

42) 柳得恭『並世集』巻2では武輝晋とする。

43) ベトナムの研究者は、柳と朴がこの1790年の交流の重要な役割を演じたことについて、一切触れていない。

朴齋家も、1790年夏の乾隆帝の八旬万寿節の随行の様子を詩として記録している。まず、『貞蕤閣三集』には、朴の作である「安南吏部尚書潘輝益、灑沢侯工部尚書武輝瑯に贈る」と題する五言律詩が2首載る。朴はいつどこでこの詩を作成したか記載していないが、上述の柳得恭の記述から、円明園で朝鮮側が贈った五律2首を指すものと思われる。この朴の詩に続いて、「潘輝益等に次韻す。副使に代りて作す」と題する七言律詩1首が載る。これも徐の記録には武輝瑯に和したものとして同文が載る。ただ、徐の記録では誰が作詩したのかは明らかにされていないが、朴の「潘輝益等に次韻す。副使に代りて作す」という記述からすると、詩の作者は朴齋家であったと推察される。徐の記録にはもう一つ、潘輝益に和した七言律詩1首も載せるが、これは『貞蕤閣三集』には掲載されない。

一方、『縞紵集』は、朴齋家の詩や文などを、息子の朴長穉が編纂した書である。『縞紵集』巻2で、朴齋家は、ベトナム使臣陶金鐘について「政省内書」という肩書を持つことを記した後、潘輝益についても触れている。⁴⁴⁾ それから朴齋家の人（副使徐浩修か）に代わって徐浩修に和した七言律詩を載せるが、この詩は、徐の記録では徐が武輝瑯に和したと記され、また徐は武へ贈った詩を代作させたとは記載しておらず、朝鮮側の記述に混乱がみられる。

更に潘輝益に続けて武輝瑯が紹介され、朴齋家が武輝瑯に贈った「馮李題襟日、東南故事伝。……」から始まる五言律詩1首を載せる。⁴⁵⁾ ここでも馮克寛と李晔光の交流が、両国使節、特に朝鮮にとっては象徴的な交流であったことがわかる。

『縞紵集』巻2最末尾には「円明園にて宴に侍り、朴檢書より扇詩を得、即わち其の韻聊に次し、以って情を送る」と題する潘輝益の作による五言律詩1首と朴檢書（齋家）の元詩1首が載る。それに続けて陶金鐘が朴齋家に贈った「敬んで朝鮮国朴檢書に和す」と題する五言律詩1首が載るが、これは柳の『並世集』巻2に載るものと同題、同文である。⁴⁶⁾

V-4 1790年の交流(2)——ベトナム史料について

一方、ベトナム側に残される史料としては、従来、潘輝益の詩文のみが紹介されていた[Bùi 1995: 45; 姜 2000: 89, 90-92; Nguyễn 2007: 4]。しかし、『越南漢文燕行文献集成』には西山政権から派遣された使者たちの記録が含まれている。

まず、よく知られているのが、潘輝益の撰による『星槎紀行』で、八旬万寿節の際、熱河まで赴いた時の紀行文である。『越南漢文燕行文献集成』第6冊に収められている〔復旦大学文

44) 柳得恭の『並世集』巻2の詩では武輝瑯の肩書であった灑沢侯を潘の肩書としている。

45) 1790年夏に両使節で交わされた唱和詩の多くは大体、徐、柳及び朴の記録と重複するが、朴が武に贈ったこの詩は、徐及び柳の記録にも載らない

46) 『燕行録選集補遺』下巻には、朝鮮使節の正使黄仁点がハングルで記した『승사록』が掲載されている。拙稿では、副使の徐浩修の『燕行紀』を主に利用したので、今後の研究ではこの黄の記録の利用も必要であるが、別稿で検討したい。

史研究院他 2010 vol.6: 181-288]。『星槎紀行』の構成は、時系列に引を記した後、詩を載せる形態をとっている。熱河では、「朝鮮国使に東す」と題し、「朝鮮正使駙馬黃秉礼、副使吏曹判書徐洗修、書状宏文館校理李百亨と我が使連日宴に侍り頗る相い歎洽、因りて投ずるに詩を以てす」と引を記した後、⁴⁷⁾ 朝鮮使節の徐浩修や柳得恭も記録する潘輝益の七言律詩が1首載る。これに対し朝鮮使節の副使徐が「朝鮮徐判書和して送るに即席再東す」と題する七言律詩1首を贈っているが、これは朝鮮側の史料には見られない。更に『星槎紀行』には「徐判書の和詩を付して録す」と題する七言律詩1首が載るが、この詩は徐の記録では、潘輝益が徐に和したと紹介しているが、徐の記す七言律詩と若干文字異同が見える [同上書: 235-237]。

『星槎紀行』には、円明園での交流も記す。まず、潘から徐に対し「三たび朝鮮徐判書に東す」と題する七言律詩1首が贈られた。これに対し「朝鮮李校の和詩に再び前韻して贈る」と題する七言律詩1首が続く。ここでいう李校は正しくは李校理とすべきで、書状官の李百亨のことであろう。⁴⁸⁾ この詩に続けてさらに「李校理の和詩を付録す」と題する七言律詩1首が載る。「三たび朝鮮徐判書に東す」以下の七言詩はいずれも朝鮮側の史料には記録されていないベトナム側が朝鮮に贈った詩だが、この1790年の両国の使節間で交わされた詩のうち朝鮮側に残るものと韻が全て一致する。

その後、円明園での宴の最中、潘は朴齋家から詩を求められる。すなわち「宴に侍り西苑にて、朝鮮書記樸齋家、扇詩を携えて就呈す。即席和して贈る」と引のある潘輝益の五言律詩1首がそれである [同上書: 239-241]。朝鮮使節の朴齋家らが扇に詩を書きベトナム使節に贈った話は、徐の記録、柳の『灤陽録』にも記載がある。

その後も円明園の宴の際、両使節は毎回舟を並行させるほどの付き合いであったと『星槎紀行』は記している [同上書: 241]。この引の後におそらく扇に記したと思われる「樸齋家の詩を付録す」と題する五言律詩1首が載る [同上書: 241-242]。この円明園で潘と朴との間で交わされた五言律詩は、すでに触れたように朴の『縞紵集』巻2の最末尾に載るが、若干文字の異同が認められる。

以上の潘輝益の詩はすべて、潘輝益、武輝瑨と呉時任（1746-1803年）の三人の詩を集めた『燕台秋詠』にも載る。⁴⁹⁾

次に武輝瑨の撰による『華程後集』を確認したい。『華程後集』は、『越南漢文燕行文献集成』第6冊に載る [復旦大学文史研究院他 2010 vol.6: 345-398]。使行の様子を時系列に並べた詩集である。この中にまず「朝鮮国使に東す」と題する七言律詩1首が掲載される [同上書: 368-

47) 潘が挙げる朝鮮使節の正副使の名は明らかに誤りで、ベトナムの Bùi Duy Tân 氏をはじめ姜東燁氏、Nguyễn Minh Tường 氏はこれを正副使の本名として誤ったまま踏襲している [姜 2000: 89]。

48) 徐の『燕行紀』巻1及び『熱河紀遊』の冒頭には「書状官弘文館校理李百亨」とある。

49) 『燕台秋詠』は『越南漢文燕行文献集成』第7冊に収録され [復旦大学文史研究院他 2010 vol.7: 249-402]、同書の中に潘らの詩が載る [同上書: 376-381]。

369]。この詩は、朝鮮側の徐の記録、柳の『並世集』『瀋陽録』にもそれぞれ載るが、朴齋家はこの詩を記録していない。続けて、朝鮮使節が武に贈った七言律詩1首が「朝鮮国使吏曹に和す詩を付して云う」として掲載される[同上書: 369]。この詩は、すでに指摘したように朝鮮の徐の記録には単に武に和した詩としか記載されないが、朴齋家の『貞蕤閣三集』によれば、朴が副使の徐に代って作成したとある。この武輝瑠の「朝鮮国使吏曹に和す詩」という言葉からすると、やはり朴の作とみて間違いなさそうである。続けて「是の日旨を奉じて先に円明殿に回朝す。鮮使後二日方に起程す。因りて前韻に依り再び東す」という引を持つ七言律詩1首を載した[同上書: 369-370]。これに対する「朝鮮国使の円明殿に到り再び復するを付す」と題する朝鮮側の七言律詩1首も載せるが[同上書: 370]、いずれの詩とも朝鮮側の資料中には見られない。

熱河から円明園に帰還後、武も朝鮮側に立て続けに詩を贈っている。まず「三たび朝鮮国使に東す」と題する七言律詩1首であるが、これも朝鮮側の記録には残らない[同上書: 371]。続いて「四たび朝鮮副使李校理に東す」と題するが[同上書: 371-372]、副使であれば「李校理」ではなく徐浩修でなければならず、誤りであろう。李校理とは上述したように書状官李百亨を指す。さてこの「四たび朝鮮副使李校理に東す」には、「辛卯の年、ベトナム使節であった私の父は貴国(朝鮮)の副使である李公、諱は致中に逢い、詩を贈答した。李氏の詩である、「真心はどうして通訳を通して伝えることができようか、心はむなしく路の中にゆだねる。」の句は、ベトナムでも伝誦されている。ここで又た貴国の使節に逢った。これに問うに前の李氏の親戚であるという。また一つの不思議な出会いである。』⁵⁰⁾ という引の後に七言律詩1首が載る。この詩、及び李致中の詩も、やはり朝鮮側には全く残らない。武の引にある「辛卯」年は1771年であるが、これはベトナム使節出発した年で、実際の接触は1773年である。また、武が1773年の両使節の交流の朝鮮使節の書状官であった李致中の詩を諳んじることができたのは、既述したとおり1773年の両使節の接触の際、ベトナム使節の副使であった武輝瑠が武輝瑠の父であったため、父から見聞したためであろう。父と同様李姓の朝鮮使節との交流を喜んでいる。

武が李百亨に贈った詩に続けて「又た朝鮮使行人、内閣検書摸序家の詩韻に和す」と題する五言律詩1首を載せる[同上書: 372]。この詩も朝鮮側には記録が残らない。この「摸序家」とは「朴齋家」の誤りであろう。Nguyễn Minh Tường氏はこの「摸序家」なる人物を Mộ Tư Giaとして1747年の両使節の交流の時の朝鮮使臣の一人としており[Nguyễn 2007: 4]、この他、韓国の姜東燁氏も Bùi Duy Tân氏の論文に基づいて、1747年の朝鮮使臣を「李校理、摸序家」としているが[姜 2000: 89]、これはいずれも「李百亨、朴齋家」の間違いであろう。⁵¹⁾ ベトナム

50) 「辛卯使部家尊、逢貴国副使李公諱致中、以詩贈答。李詩有曰。肝胆豈輪鞞舌裡、精神虚注路班中。為本国伝誦、於此來又逢台駕。詢之為前李公堂親、亦一奇邂逅也。」

51) ただし、Bùi氏は Mộ Tư Giaではなく Mạc Tư Giaとしている[Bùi 1995: 2]。

ム側資料は朴齋家の姓「朴」の字を「樸」としている例があり、ここから筆写の過程で「摸」となった可能性が高い。この「又た朝鮮使行人，内閣検書摸序家の詩韻に和す」と題する五言律詩は朝鮮側には記録が残らないが、この詩の韻は、柳の『灤陽録』に載る朴齋家が武輝瑱に贈った詩の韻と全く同じで、この「摸序家」なる人物は朴齋家で間違いないと考えてよいだろう。

最後に段浚という人物の記録が残る。この人物は、朝鮮使臣柳得恭の『灤陽録』巻1「安南諸王」の項に出てくる「段阮俊」なる人物と同一人物ではないかと思われ、ベトナムの Nguyễn Minh Tường 氏も 1790 年の交流のベトナム使臣の名には潘輝益と「Đoàn Nguyễn Tuấn」なる人物 2 名をあげており [Nguyễn 2007: 4]、段阮浚というのが本名と考えてよさそうである。あるいは、1773 年の両使節の交流の際のベトナム正使は段阮俣 (1728-83 年) で、彼は朝鮮使節と唱和詩を交わしているが、あるいは段浚は、段阮俣の一族かもしれない。『越南漢文燕行文献集成』第 7 冊には、段浚の撰による詩集『海煙詩集』([復旦大学文史研究院他 2010 vol. 7: 1-46]) と『海翁詩集』([同上書: 47-102]) の 2 つが載るが、そのどちらにも朝鮮使節と交わした詩が載り、詩の並びや引も若干の文字異同や欠如が見られるが、ほぼ同じである。

まず、「韻に次して東朝鮮判書徐，翰林李に東す」と題する七言律詩 2 首が載る [同上書: 29, 77-78]。朝鮮使臣の徐判書は、徐浩修を、翰林李とは書状官李百亨を指すと思われる。続けて段から七言律詩 2 首が贈られているが、『海煙詩集』『海翁詩集』のいずれの引も判読がやや困難だが、韻の踏み方から最初の 2 首に対応したものとなっている [同上書: 30, 78-79]。

さらに、「朝鮮の元作を付す」と題する朝鮮側の七言律詩 2 首が載る [同上書: 30-31, 79-80]。このうち最初の「家在三韓……」で始まる詩は末尾に「徐浩修」とあるが、上述したように、実際は朴齋家か柳得恭が徐に代わって作詩したものである。続くもう 1 首は末尾の詞書によると李百亨の作とあり、⁵²⁾ 朝鮮側の資料には見えない詩であるが、潘輝益の『星槎紀行』の「李校理の和する詩を付して録す」と題する詩と同じで [復旦大学文史研究院他 2010 vol. 6: 240]、李百亨の作と考えて間違いない。

この後、「朝鮮書状詩を以って教を請う。余人に代わりて之に和す。亦た迄いに復た見えず」と題する五言律詩 2 首を載せる [復旦大学文史研究院他 2010 vol. 7: 31, 80]。ここで段浚が誰に代わって作詩したのかは定かではない。この詩の後に「朝鮮の元作を付す」と題する五言律詩 1 首が載るが [同上書: 31, 80-81]、朝鮮使臣の誰の詩かは記録がなく作者は不明である。

現段階で把握できる両使節の交流に関する資料は以上である。このように 1790 年夏の両使節の交流は膨大な記録が残る。

52) 『海翁詩集』には、末尾に李百亨の名は見えない。

V-5 1795年の交流⁵³⁾

その後、1791年暮れから翌年正月にかけて、そして1792年から翌年にかけて両国使節が顔を合わせているはずだが、交流を示す史料は見あたらない〔清水 2001: 41-43〕。朝鮮側も、清朝から提供されるベトナム情報が激減したせい、その後の西山政権の動向が伝えられたのは『同文』補続、使臣別単の「壬子 謝恩兼冬至行書状官金祖淳聞見事件」になる。中でも重要な情報は阮文恵の死であった。⁵⁴⁾

乾隆57(1792)年に確立された西山政権の清朝への入貢規定では、貢期は二年一貢、四年一次遣使入京、両貢並進と決められ、貢物も金銀器の進呈が免ぜられるなど薄来厚往の優待となったにもかかわらず〔山本 1975: 406〕、ベトナム南部の嘉定地方を根拠地とする阮福映との内戦が激化したため、西山政権は規定通り清朝へ入貢できなかった。

乾隆60(1795)年の両国使節の交流について見てみる。まず、ベトナム使節は、詳細は不明だが、『清高宗実録』巻1493、乾隆60年12月戊戌の条に「安南使臣阮光裕」とあることから、正使はこの阮光裕であろう。この人物の経歴も詳細は不明である。

副使は阮倂(1761-1805年)である。彼は1789年から翌年にかけて派遣された進貢使の副使も務めたことがあり、今回が2度目の北京行きであった。使節派遣の最大の目的は、乾隆帝の禪譲と翌年元日を以て即位する嘉慶帝の即位を祝うためであった。阮倂は、この度の使行を『華程消遣集』と題する詩集として記録しており、これは『越南漢文燕行文献集成』第8冊に収録されている〔復旦大学文史研究院他 2010 vol. 8: 101-274〕。

一方の朝鮮使節は、乾隆60年10月10日に漢城を出発、翌年3月に帰国した三節年貢兼謝恩使(正使: 閔鍾頭、副使: 李亨元、書状官: 趙徳潤)と、乾隆帝の禪譲と嘉慶帝の即位を祝うため乾隆60年11月21日に漢城を出発、翌3月に帰国した進賀兼謝恩使(正使: 李秉模、副使: 徐有防、書状官: 柳畊)の2組の使節である。

両使節の交流を示す史料は朝鮮側には残らず、唯一の手掛かりはベトナム使節副使阮倂が記した『華程消遣集』だけである。この中に、朝鮮使節との唱和詩が残る。まず、「朝鮮国使臣に東す」という阮倂が作詩した七言律詩が1首載る〔同上書: 264-265〕。朝鮮副使李亨元が阮倂に寄せた唱和詩である「朝鮮国副使礼曹判書李亨元の和したる韻体を付して録す」がすぐそのあとに続くことから、これは李亨元が阮倂に寄せた唱和詩であることがわかる〔同上書: 265〕。この後、更に「再び朝鮮国使臣に東す」と題する七言律詩が1首載る〔同上書: 265-266〕。

53) 前稿では、西山政権時代の両使節の交流は1790年のものだけとしたが〔清水 2001〕、ベトナムの研究者の指摘により1795年にも両使節で交流が行われていたことがわかった〔Bùi 1995: 45; 姜 2000: 89; Nguyễn 2007: 4〕。

54) 『清高宗実録』巻1421、乾隆58年1月22日丙辰の条では阮恵の死は「上年(1792)九月二十九日」とあるが、ベトナム史料である『大南寔録正編第一紀』巻6では「西賊阮文恵死。」の記事を秋七月とする。ただし『大南正編列伝初集』巻30、偽西列伝では「九月二十九日、恵死。」と『大清実録』と同じ日時となっており、ベトナム側の史料にも混乱が見られる。

これも直後に「朝天鮮国副使礼曹判書李元亨の和したる体を付して録す」という七言律詩1首があることから、同じく李元亨が阮愔に宛てたものである〔同上書:266〕。その後、阮愔は「再び朝鮮国使臣李亨元に東す」と再度、李に七言律詩1首を贈ったが、李からの返答がなかった旨が記してある〔同上書:266-267〕。続けて「朝鮮国副使吏曹判書内閣学士徐有防の和したる体を付して録す」と題する七言律詩1首が載る〔同上書:267〕。阮愔の詩に対して李元亨が唱和できなかったことに対し、同じく朝鮮副使である徐有防が代りに贈った詩である。これに対して阮愔は「朝鮮国副使徐有防に和して答える」という七言律詩1首を贈るが、徐はこれに対する唱和詩を作成できなかったとの引がある〔同上書:267〕。最後に阮愔は、「朝鮮国使臣に別れを贈る時に同じく礼部饒宴に赴く」と題する七言律詩1首を作るが〔同上書:268〕、その直後に「朝鮮国徐有防の和したる体を付して録す」と題する七言律詩1首が載ることから、これは徐有防と阮愔との間で交わされた唱和詩であることがわかる〔同上書:268〕。つまり、阮愔らベトナム使節は、2つの朝鮮使節と詩の唱和を中心に交流していたことがわかる。

西山政権と朝鮮使節の交流は現在のところ、この交流を最後に確認されていない。と同時に現在確認し得る18世紀最後の両使節の交流ということになる。

その後、乾隆帝の跡を継いだ嘉慶帝はベトナム情勢について関心をほとんど示さなかった。西山政権成立時にあれほど報告されたベトナム情報も、ベトナム本土で西山政権と南部から興った阮福映との間で内戦が激化したにもかかわらず、清朝はそうした情報を積極的に収集せず、当然清朝を訪れる朝鮮使節たちにもベトナム情勢はほとんど耳に入らなくなり、朝鮮史料からもベトナム情報が激減する。

嘉慶4(1799)年正月、乾隆帝が崩御する。朝鮮は陳慰兼進香使を同年3月に、更に進賀兼謝恩使を同年7月に清朝に対して発している。一方、西山政権も同年7月に進香使を派遣したようだが、使節が北京に到達したかは不明である。⁵⁵⁾西山政権は内戦が激化していたため嘉慶6(1801)年10月に4回分の朝貢を1802年に一括して行いたいと願い出る。しかし、朝貢使を派遣する間もなく、1802年6月に西山政権は崩壊する。

朝鮮使節によって新たにベトナム情勢が報告されるのは、すでに西山政権が崩壊し、阮福映により新王朝「越南」国が建国され中国に承認された後である。

VI 虚構の交流

現存する記録が伝えるとされる両使節の交流の中には、本当に交流があったのか確定できない事例が幾つか見られる(表1)。これらについてはすでに拙論で検討しているが〔清水

55)『清仁宗実録』には、西山政権の阮光縉が進香使を派遣した記事が散見するが、派遣された人物名や北京の滞在の様子などは一切記述がない。

表1 交流が不確かな例

年代	ベトナム使節	朝鮮使節	出典	備考
1 1308年	莫挺之	不明	『公余捷記』巻6, 『人物志』, 『南天珍異集』巻1	全てベトナム史料
2 15世紀末か	黎時拳	曹仲	『稗官雜記』巻2, 『海東雜録』巻12, 『通文館志』巻7	全て朝鮮史料
3 1697年	阮登道	不明	[Nguyễn 2001: 230-233]	ベトナム出版物

2007], ベトナムの研究者が指摘する1748年の両使節の交流については、拙論でも未だ考察してこなかったもので、本章では、この1748年の交流について若干の考察を試みたい。

VI-1 1748年の交流

この交流について指摘したのはベトナムの研究者 Bùi Duy Tân 氏である [Bùi 1995: 45]。Bùi 氏の論文をもとに、その後ベトナム、韓国の研究者がこの交流を両国使節の交流例の一つに挙げているが [姜 2000: 89; Nguyễn 2007: 4]、実はこの交流の実態は今一つはっきりしない。Bùi 氏によれば、ベトナム使臣阮宗室⁵⁶⁾と朝鮮使節の間で唱和詩の交換が行われたとする。ただし、Bùi 氏はこの両者の交流の出典を明記せず、Trần Văn Giáp 氏のベトナム語訳を紹介しているだけで詳しい交流の内容を紹介していない [Bùi 1995]。⁵⁷⁾ また、韓国の姜東燁氏は Bùi 氏の論文をもとに唱和詩の相手を、ベトナム側は阮宗室、朝鮮側を李校理、摸序家としているが [姜 2000: 89],⁵⁸⁾ これら朝鮮使節の名は実名でないことは一目瞭然である。「李校理」及び「摸序家」とは、先に触れたように1790年の乾隆帝の八旬万寿節に朝鮮使節として派遣された書状官の李百亨と朴齋家の間違いである。何らかの原因で阮宗室の唱和詩の相手を誤ったものと思われる。

ベトナム使節の阮宗室 (1693-1767年) は、ベトナム黎朝の景興2 (1741) 年に副使として、さらに同8 (1747) 年には正使として北京に派遣されている。Bùi 氏の言葉を信じれば、翌1748年の初頭頃に北京で両使節が接触したものと推定される。

景興2年の派遣の際の記録としては、正使であった阮翹との合作である『乾隆甲子使華叢詠』が残されており、『越南漢文燕行文献集成』第2冊に掲載される [復旦大学文史研究院他 2010 vol.2: 39-128]。また、景興8年に北京に赴いた際の史料は、『使華叢詠集』が同じく『越南漢文燕行文献集成』第2冊に載る [同上書: 129-286]。この他、作成年代不詳の阮翹、阮宗室の『使

56) 阮宗室は、『全書』では阮宗室とし、韓国の姜東燁氏は阮宗室としている。また、『越南漢文燕行文献集成』第2冊では阮宗室としているが、本来、阮宗室が正しいと思われる。

57) Nguyễn Minh Tường 氏も利用しているようだが、ハノイの国家図書館には Trần Văn Giáp 氏による Một số tư liệu về việc giao lưu văn hóa giữa Việt Nam và Triều Tiên (ベトナムと朝鮮との文化交流に関する資料) と題する未刊行の資料集が所蔵されているというが [Nguyễn 2007: 11 の注1]、筆者は未見。

58) 本稿注51)を参照

程詩集』も『越南漢文燕行文献集成』第2冊に載るが〔同上書：287-379〕、どの史料にも朝鮮使節との交流については記載がない。

一方、1748年初頭に北京に達していたと考えられる唯一の朝鮮使節は、洛豊君李楙、副使李吉輔、書状官趙明鼎らからなる三節年貢兼謝恩使で、乾隆12年11月6日に漢城を發っている。ベトナム使節が北京で接触したと考えられる朝鮮使節はこれ以外には考えにくいだが、両使節の交流は、朝鮮側も記録が残らず確認ができない。

現段階では、他の使節との間違いである可能性も捨てきれない。

お わ り に

漢字という当時の国際文字を使って、中国という異国の地で、ある程度の意味疎通が可能であったのは、琉球を除くとベトナムと朝鮮の使節だけである。ただ、両国に残される史料は、その内容や性格に大きな違いが見られる。まず、朝天録や燕行録と呼ばれる朝鮮使節の記録は出発から帰国までを日記形式でほぼ欠かさず記録しているのに対し、ベトナムのそれは、多くは時系列にそった詩集からなる。このため、両使節の会話内容（筆談や通訳を介してのもの）のほとんどは朝鮮側にしか記録されない。この差はどこから来るのであろうか。これは、ベトナム、朝鮮における漢字使用の普及の程度や、両国における「知識人」達の漢文、漢詩の作成能力の差によるのか。両国の漢文、漢詩の構成上の正確さなども検討する必要がある。この他、朝鮮使節が毎年、複数以上の使節を派遣していたのに対し、ベトナムは数年に1度、または王朝の交替等に伴い長期間の中国への使節派遣停止を余儀なくされるなど、使節行の記録を残す条件も異なっていたことも要因の一つかもしれない。

また、17世紀までは1596年暮から翌年初めにかけて交流したベトナム使臣馮克寛と朝鮮使臣李晬光を唯一の例外として朝鮮側にのみ記録が残るのに対し、18世紀に入るとベトナム側にしか記録が残らない例が出て来る。この他、ごく例外的に中国の文献にしか記録が残らない例もあらわれるようになる。このような変化の原因は今のところはっきりしない。

本稿では、拙論発表後に韓国、中国から新たに出版された両使節の記録を用いて、拙論での誤りや新発見による事実を加除しつつ両国使節間交流について時系列に検討してきたが、ベトナム、韓国及び中国で個々に発表されている両使節の交流の数よりも実際に行われた交流の数は更に多いことが判明した。一方、中には史料的に未確認な交流が幾つか存在することや意図的に交流が創られた可能性も指摘した。

朝鮮使臣は、中国はもちろん、諸外国の情報収集も熱心に行い、積極的にベトナム使節にアプローチしていた。一方のベトナム使節は、今回刊行された『越南漢文燕行文献集成』に収録される記録を見る限りでは、中国はもちろん、朝鮮に対してもそれほど情報収集に関心を示し

ていないように見受けられる。

朝鮮使節の場合、復命時に朝鮮国王から発せられたベトナム情勢に関する意欲的な質問が記録されており、殊に嘉靖年間と乾隆年間の明、清それぞれのベトナムへの軍事介入時にはベトナム情勢に関する情報は飛躍的に増加する〔崔 1966: 125-150; 1981: 52; 清水 2001: 32-34〕。それに対して、ベトナム側は帰国後、ベトナム皇帝に対する復命は当然行ったであろうが、朝鮮はもちろん、中国に関する情勢を少なくとも文字に残して記録する傾向が極端に少ない。例えば、豊臣秀吉、満州族による朝鮮侵略については、ある程度の情報は持っていたことはわかるが、朝鮮側の史料の豊富さの比ではない。当時のベトナム王朝の首脳部や使節にとって、朝鮮は情報収集の対象ではなかったということなのであろうか。

本稿では、主に両国の使節が残した紀行文及び詩集を利用したが、1481年の交流のように、朝鮮側の燕行録や年代記などではなく、個人の文集にのみ記録されている場合もあり、今後も新たな交流が確認される可能性もある。これはベトナム側も同様である。

今回紹介したベトナム・朝鮮両使節の交流は、単に両国の交流史として捉えるのではなく、朝鮮使節と中国文人たちとの交流、朝鮮通信使と日本文人たちとの交流、そしてベトナム使節と中国の文人たちとの交流、さらには琉球も含む複合的な東アジアの文化交流、外交の中で捉え直すことが今後必要となろう。本稿では、1802年に成立したベトナム最後の王朝阮朝と朝鮮使節の交流については触れることは出来なかった。また、使節の相手国観や唱和詩の分析なども本格的に行うことができなかった。これらの点については稿を改めて分析したい。

参考文献

- 金 永健. 1942. 「安南国使臣唱和問答録に就いて」『歴史學研究』12(3): 75-80. (原題のまま〔金 1943〕に再収)
- . 1943. 『印度支那と日本との關係』東京：富山房. (上記金氏論文の引用ページはこの書による)
- 金 榮鎮. 2009. 書評「夫馬進著『燕行使と通信使』」清水亮 (訳). 『東洋史研究』67(4): 144-153.
- 伍 躍. 2007. 「朝貢関係と情報収集——朝鮮王朝対中国外交を考えるに際して」『中国東アジア外交交流史の研究』京都：京都大学出版会.
- 清水太郎. 2000. 「ベトナム使節と朝鮮使節の中国での邂逅——18世紀の事例を中心に」『北東アジア文化研究』12: 15-31. (Shimizu Taro. 2001. *Cuộc gặp gỡ của sứ thần Việt Nam và Triều Tiên ở Trung Quốc, trọng tâm là chuyện xảy ra trong thế kỷ XVIII. Tạp chí Hán Nôm* 48: 88-99.)
- . 2001. 「ベトナム使節と朝鮮使節の中国での邂逅 (2) —— 1790年の事例を中心に」『北東アジア文化研究』14: 31-47.
- . 2002. 「ベトナム使節と朝鮮使節の中国での邂逅 (3) —— 1597年の事例を中心に」『北東アジア文化研究』16: 35-54.
- . 2003. 「ベトナム使節と朝鮮使節の中国での邂逅 (4) —— 16世紀以前の事例を中心として」『北東アジア文化研究』18: 63-83.
- . 2005. 「ベトナム使節と朝鮮使節の中国での邂逅 (5) —— 17世紀の事例を中心として」『北東アジア文化研究』22: 39-58.
- . 2007. 「朝鮮使節とヴェトナム使節の中国での邂逅——虚構の交流」『전북사학』[全北史学] 31: 113-138.

- 鈴木中正. 1967a. 「乾隆安南遠征考 上」『東洋学報』50(2): 1-23.
- . 1967b. 「乾隆安南遠征考 下」『東洋学報』50(3): 79-106.
- 藤塚 鄰；藤塚明直（編）. 1975. 『清朝文化東傳の研究——嘉慶・道光學壇と李朝の金阮堂』東京：国書刊行会.
- 藤原利一郎. 1975. 「黎朝前期の明との関係」『ベトナム中国関係史——曲氏の抬頭から清仏戦争まで』山本達郎（編）, 253-332 ページ所収. （「ヴェトナム黎朝前期の明との関係」と改題し [藤原 1986] に再収）.
- . 1986. 『東南アジア史の研究』京都：法蔵館.
- 夫馬 進. 2003a. 「林居中・夫馬進編『燕行録全集日本所蔵編』」『東洋史研究』61(4): 165-169.
- . 2003b. 「日本現存朝鮮燕行録解題」『京都大学文学部研究紀要』42: 127-238.
- 山本達郎（編）. 1975. 『ベトナム中国関係史——曲氏の抬頭から清仏戦争まで』東京：山川出版社.
- 米谷 均. 1998. 「史料紹介——東大史料編纂所架蔵『日本関係朝鮮史料』」『古文書研究』48: 74-110.
- 姜 東燁. 2000. 「朝鮮時代 東南아시아 文学과의 交流研究 [朝鮮時代東南アジア文学との交流研究]」『淵民学志』8: 63-130.
- 崔 常寿. 1966. 『韓国과 越南과의 關係』[韓国と越南との關係] ソウル：韓越協會.
- 崔 信浩. 1981. 「韓国과 安南・琉球와의 文学交流試考」[韓国と安南・琉球との文学交流試考] 『韓国漢文学研究』5: 241-252. （崔信浩. 2001. 「韓国と安南・琉球との文学交流試考」（薛末子訳）『北東アジア文化研究』14: 49-64.）
- 河 宇鳳. 2004. 「조선시대 안남국과의 문화교류——양국 사신간의 필담창화를 중심으로」[朝鮮時代安南国との文化交流——両国使臣間の筆談唱和を中心に] 『제 350 회 국학연구발표회 제 2 부』[第 350 回国学研究発表会第 2 部] における河氏の発表レジュメ: 1-17.
- 朴 現圭. 2004. 「収録于清孫鉉《皇清詩選》中的朝鮮人詩篇」『東亞人文学』6: 99-110.
- . 2005. 「《皇越詩選》所載越南与朝鮮使臣酬唱詩」『域外漢籍研究集刊』1: 293-303.
- 復旦大学文史研究院；越南漢喃研究院（主編）. 2010. 『越南漢文燕行文獻集成』Vol.1-25. 上海：復旦大学出版社.
- 左 江. 2008. 「『燕行録全集』考訂」『域外漢籍研究集刊』第 4 輯: 37-65.
- Woodside, A. B. 1988. *Vietnam and the Chinese Model: A Comparative Study of Vietnamese and Chinese Government in the First Half of the Nineteenth Century*. Cambridge, Mass. Harvard University Press.
- Bùi Duy Tân. 1995. “Tứ hải giai huynh đệ”: Những cuộc tao ngộ sứ gia-nhà thơ Việt—Triều Tiên đất nước Trung Hoa thời trung đại. *Tạp chí Văn học* (10): 44-51.
- Cao Viên Trai (soạn); and Võ Oanh (dịch). 1961. 『黎朝歷科進士題名碑記』[*Lê triều lịch khoa tiến sĩ đề danh bi ký quyền thư nhứt*]. Sài Gòn: Bộ quốc gia giáo dục.
- Nguyễn Đức Huệ. 2009. Cuộc tiếp xúc giữa sứ thần Việt Nam Lưu Đình Chất và sứ thần Triều Tiên Lý Đẩu Phong đầu thế kỷ XVII. *Tạp chí Hán Nôm* 96: 20-23.
- Nguyễn Minh Tuấn. 1999. Thêm bốn bài thơ xướng họa giữa Lê Quý Đôn với sứ thần Triều Tiên. *Tạp chí Hán Nôm* 41: 79-84.
- Nguyễn Minh Tường. 2007. Một số cuộc tiếp xúc giữa sứ thần Việt Nam và sứ thần Hàn Quốc thời trung đại. *Tạp chí Hán Nôm* 85: 3-12.
- Nguyễn Thế Long. 2001. *Chuyện đi sứ-tiếp sứ thời xưa*. Hà Nội. Nhà xuất bản văn hóa thông tin.
- Niculin N. 1987. Quan hệ văn học Việt Nam Triều Tiên cuối thế kỷ XVI—giữa thế kỷ XVIII. *Tạp chí Văn học* (2): 77-81.